

「僕がこの本から自分のものになできたことがあるとすれば、『辛抱と我慢』ですね」

十一月一日の朝日新聞読書欄に載った、自民党の古賀誠元幹事長のインタビュー記事。古賀氏は思い出の本として、マックス・ヴェーバーの「職業としての政治」を紹介した。

古賀氏はこんなことを語った。「権力は怖い。我慢も辛抱もやめて、決めてしまえば決まる、という場面はいくらでもあるから。でもヴェーバーの言うように激情だけではだめだ、冷めた頭脳でいなければいけない、と自分を戒めたことが何度もある」

政治が暴力を背後に控えた権力を用いる行為であり、政治家に求められるのは、動機の純粹さ以上に将来に対する結果責任である。かつての自民党道路族の実力者でこわもての古賀氏が、政治の師と仰ぐ田中六助元幹事長の薦めで、そんな内容の本を何百回も熟読したのだという。

古典と古賀氏の組み合わせはやや意外だが、権謀術数がうずまく永田町を生き抜いた「軍師」が、そういった信条を持つていたという話は興味深い。

◇ ◇

古賀氏は自民党の保守本流派閥、宏池会（現在の岸田派）で政治家人生を歩んだ。

「宏池会」的なるものの可能性

宏池会は一九五五年の自民党結党の二年後、その後首相になる池田勇人の政治活動を支援する後援会から始まった。

吉田茂以来の軽武装・経済重視路線を引き継ぎ、池田のほか、大平正芳、鈴木善幸、宮沢喜一の首相を輩出した。官僚出身者が多く政策論争は得意だが、権力闘争を苦手とすることから、他派閥やマスコミから「お公家集団」と揶揄されてきた。

義理人情と根回し、ときに威圧的な空気を発して政治を動かす古賀氏は派内で異質な存在だったはずだが、その権力観は間違いない、この派閥で醸成された。

宏池会の思想の背骨となったのは前尾繁三郎や大平、宮沢らの保守主義の考え方だ。福永文夫著の「大平正芳」によると、それは「議会主義、民主主義を擁護し、中庸の道を進む」というコンセンサス重視の政治だった。

大平の次の言葉に一端がうかがえる。「権力というものそれ自体孤立してあるものではなく、権力が奉仕する何かの目的がなければならぬはずだ。権力はそれが奉仕する目的に必要な限りその存在が許されるものであり、その目的に必要な限度において許される」

◇ ◇

民主党の岡田克也代表が今年一月の代表選で党の目指す方向性として「一番びたつとくるのは昔の宏池会だ」と発言した。二〇一二年の政権転落後の党の指針を定めきれない中で、お手本にしようとしたのは、政敵であるはずの自民党のかつての主流派路線だった。

岡田氏の発言に、宏池会で宮沢らの薫陶を受け、保守本流意識の強い自民党の谷垣禎一幹事長は「民主党のリベラル的政策は砂上の楼閣だ。空疎なりベラルはやつつけないといけない」と激しく反応した。

谷垣氏の感情の入り交じった言い方には「市民派やりベラル左派の議員が多い民主党と、保守の宏池会の思想はそもそも相いれない」とのこだわりがにじむ。一方で、自らが支える安倍晋三政権が国家主義的な志向を強め、自民党の中から「宏池会」的なものが失われていることへの焦りもあつたのではない。

歴代内閣と比べて高い支持率を維持し続ける現政権だが、強引な政治運営に危うさが目立つ。「保守とは何か」「リベラルとは何か」との定義は横に置くとして、国民の自由を最大限に尊重し、権力行使への謙虚さを旨とする政治が、いま多くの人々から期待されているのではない。

◇ ◇